

メイヤロフとノディングスの分岐点

中野啓明

The Diverging Points of Mayeroff and Noddings

Hiroaki Nakano

校内暴力、いじめや不登校等の「教育病理」的問題は、日本だけの問題ではなく、欧米においても起こっている。したがって、こうした「教育病理」的問題は、一種の文明病としての側面を持つとも捉えることができる。つまり、現代社会における人間関係の歪みや他者関係の未熟さに帰因するという捉え方である。そこで、こうした「教育病理」的問題の解決方法の一つとして、⁽¹⁾「ケア (care)」への関心が高まってきている。

「ケア」という用語は、医療、福祉、教育、カウンセリング等の様々な分野で用いられている。たとえば、「ターミナルケア」「ホスピスケア」「ケアプラン」「ケアマネジメント」などである。また、「ヘアケア」「スキンケア」などの用法もある。

「ケア」という語の日本語訳は、「児童の権利に関する条約」では、「保護」、「世話」、「養護」、「養育」、「監護」となっている。⁽²⁾また、研究社の『新英和大辞典』によれば、名詞としては「気がかり、気苦労、気づかい、心配、不安」「心配事、苦労の種、(色々な)煩勞」「注意、用心」「特に力を入れる事柄、関心事、責任、務め、注意を要する仕事」「世話、監督、保護」「一時的に預かること、保管」、動詞としては「気にかける、気をもむ、心配する」「気にする、関心を持つ、かまう、頓着する」「……………したがる、欲する」「世話をする、面倒をみる、心配してやる、かばう、大事にする、尊重する」といった日本語訳となるとしている。⁽³⁾さらに、『広辞苑』では、「ケア」は「①介護。世話。」「②手入れ」という意味を持つとしている。⁽⁴⁾

そこで、本稿においては、「ケア」、「ケアリング (caring)」とそのままカタカナで表記することにする。

この「ケア」に関する研究の先駆者としては、ミルトン・メイヤロフ (Milton Mayeroff) とネル・ノディングス (Nel Noddings) を挙げることができる。特に、ノディングスは、教育学の領域における「ケア」研究の第一人者である。

そこで、本稿においては、メイヤロフとノディングスのケアリング論を比較し、両者の共通点と相違点を抽出したい。というのも、ノディングスは、主著『ケアリング——倫理学と道德教育への女性的アプローチ——』⁽⁵⁾においてメイヤロフに言及しているからである。

I ケアリングの特質

メイヤロフのケアリング論は、主著『ケアリングについて』⁽⁶⁾で展開されている。

しかしながら、メイヤロフは、この『ケアリングについて』という著書を発表する前に、同名の「ケアリングについて」⁽⁷⁾という論文を発表している。この論文は、主著『ケアリングについて』の原型となった論文といえる。

そこで、まず、このメイヤロフの論文を考察する。

メイヤロフは、この論文の目的を、次のようにいっている。

「この論文で私は、ケアリングの特質をいくつか指摘することによって、ケアリングがさらなる探究が行われるのに価値のある分野であることを示唆したい。」⁽⁸⁾

メイヤロフがこの論文において指摘しているケアリングの特質は、以下の14である。⁽⁹⁾

- 1 差異の中の同一性 (identity-in-difference)
- 2 他者を価値あるものとして経験すること (experiencing the other as worthy)
- 3 他者の成長を援助すること (helping the other to grow)
- 4 関与と受容性
- 5 献身 (devotion)
- 6 他者の不変性
- 7 ケアリングにおける自己実現 (self-realization in caring)
- 8 忍耐
- 9 結果に対する過程の優位
- 10 信頼
- 11 謙遜
- 12 希望
- 13 勇気
- 14 責任における自由

この14の特質のうち、1の「差異の中の同一性」について、メイヤロフは次のようにいう。

「ケアリングにおける同一性の感覚は、差異の意識を含んでいるのであり、他者と自分たち自身の間の差異の意識は、私たちの間の同一性の感情 (feeling of oneness) を含んでいるのである。そこには、私たちと一緒に包んでくれている何かに、私たちが関わっているという感覚があるのである。したがって、ケアリングにおいては、差異の中の同一性の関係が根幹をなす⁽¹⁰⁾のであるが、私たちはこの事実を意識する必要はないし、通常はしていないのである。」

また、7の「ケアリングにおける自己実現」については、次のようにいう。

「ケアリングにおいては他者の自己実現が第一次的ではあるが、これは私たちの個性 (individuality) の重要性を否定しているわけではない。前述したように、ケアする者 (one

who cares) とケアされる者 (one who cared for) との基本的な関係は、差異の中の同一性の関係である。すなわち、お互いの個性と統一性 (integrity) が尊重されている同一性である。…… (中略) ……私たちは自分たちを自己実現するために他者を自己実現することを援助しようとするのではなく、他者を自己実現することを援助する中で自分たちが自己実現するのである。前述したように、ケアリングとは何かのためになされるものではない。⁽¹¹⁾

メイヤロフは、「ケアする者」と「ケアされる者」とは、「個性」という点において差異があると同時に、「ケアする者」と「ケアされる者」とを「一緒に包んでくれている何かに、私たちが関わっているという感覚がある」という「同一性の感情」をもつ、「差異の中の同一性」があるとしているのである。

メイヤロフはまた、「ケアリングにおける自己実現」は、「第一次的」には「他者」、すなわち「ケアされる者」の「自己実現」にあるとしている。しかしながら、メイヤロフは、「ケアされる者」の「自己実現」を援助していく中で、結果として「ケアする者」も「自己実現」していくとしている。ただし、「ケアする者」の「自己実現」のためにケアリングを行うのではないことを、メイヤロフは、「ケアリングとは何かのためになされるものではない」として強調している。

メイヤロフは、「ケアする者」の「自己実現」が、「ケアされる者」の「自己実現」を援助するケアリングの結果として付随してくるとしているのである。

また、この論文において、メイヤロフはケアリングの概念について、端的に次のように言っている。

「私が展開しようと思うケアリングの概念とは、比較的長い過程を経て発展していくような他の人格とのかかわり方 (a way of relating to another person) について言っているのであり、これはちょうど友情とか相互の信頼が時とともにその関係を深め、質的に変容することによってのみ現れてくるものであるということに似ている。」⁽¹²⁾

メイヤロフは、ケアリングが、「他の人格とのかかわり方」に関する概念であるとしているのである。したがって、メイヤロフにおいては、ケアリングは「ケアする者、ケアリングの関係 (a relation of caring)、ケアされる者」という3要素に関する概念なのである。⁽¹³⁾

なお、メイヤロフは、「この論文をとおして私が心に描いているある特定の例は、わが子への父親のケアリングであるが、言及している大部分についてはさらに広い一般性があり、たとえば、ある『新構想 (brain child)』へのケアリングや、ある共同体へのケアリングや、生徒への教師のケアリングであるが、ときに応じて例を挙げてそのようなケースを示していきたい」として、⁽¹⁴⁾「わが子への父親のケアリング」の例を特に念頭に置いているのである。

II メイヤロフのケアリング論

メイヤロフは、その著書『ケアリングについて』の目的を、次のようにいう。

「この小著は、二つの関連する主題を扱っている。一つはケアリングに関する一般的な記述であり、もう一つはケアリングがいかにして人の生活 (one's life) へ総合的な意味を与えることができ、位置づけることができるかの説明である。『ケアリング』と『場所の中』の存在

(being “in place”) という二つの概念は、人間の条件についての実り豊かな考え方を提示してくれる。そして、より重要なことは、この二つの概念が私たち自身の生 (lives) を私たちがより良く理解するのに役立つということなのである。⁽¹⁵⁾」

メイヤロフは、『ケアリングについて』の中で、

- ① 「ケアリング」
- ② 「『場所の中』の存在」

という、二つの主題を述べようとしているのである。

①の「ケアリング」について、メイヤロフは『ケアリングについて』の序の冒頭で次のようにいう。

「他の人格 (person) をケアすることは、もっとも深い意味において、その人の成長及び自己を実現することを援助することである。⁽¹⁶⁾」

メイヤロフは、ケアリングとは、「ケアされる者」の「成長及び自己を実現することを援助することである」としているのだ。

これは、論文「ケアリングについて」でも展開されていたケアリングの特質である「ケアリングにおける自己実現」のうち、「第一次的」な意味での「ケアされる者」の「自己実現」を強調した定義であるといえる。

メイヤロフは、さらに続けて次のようにいう。

「たとえば、わが子への父親のケアリングを考えてみよう。彼はその子を、その子自身の権利において存在しているとして、成長しようと努力しているとして尊重する。彼は、その子にとって自分が必要であると感じているし、その子の成長したいという欲求 (need) に彼がこたえることによってその子が成長するのを援助するのである。ケアリングとは、その人自身の諸欲求を満たすために、他の人格を単に利用するのは正反対のことである。私が言おうとするケアリングの意味は、他の人格について幸福を祈ったり、好意を持ったり、慰めたり、支持したり、単に興味を持ったりすることと混同されてはならない。また、ケアリングとは、分離された感情でもなく、つかの間の関係でもなく、単にある人格をケアしたいという問題でもないのである。相手が成長し、自己を実現することを援助することとしてのケアリングは、一つの過程であり、発達することを内に含む何者かへの関わり方である。それはちょうど、友情が、相互の信頼と、その関係が深まり質的に変容することをとおした時によってのみ現れてくるものであるということに似ている。子どもへの両親のケアリングと、学生への教師のケアリング、患者への精神療法家のケアリング、妻への夫のケアリングとの間に、重要な相違はあろうとも、それらはすべて共通のパターンを示していることを私は明らかにしたい。しかし、人々へのケアリングのほかに、ある意味で、私たちは他のたくさんの諸事物に対しても同様にケアすることがある。私たちは、たとえば、『新構想』(哲学的または芸術上の観念) や、ある理想や、ある共同体に対してもケアすることがある。ここでも、一人の人格へのケアリングと一つの観念へのケアリングとの間には、重要な相違があろうとも、他者の成長を援助するという共通のパターンがあることを示したい。これから私が記述し探究していくのは、ケアリングのこの一般的なパターンである。⁽¹⁷⁾」

メイヤロフは、「子どもへの両親のケアリング」「学生への教師のケアリング」「患者への精神療法家のケアリング」「妻への夫のケアリング」には、「重要な相違はあろうとも、それらはすべて共通のパターンを示している」という。さらに、「一人の人格へのケアリング」のみならず、「一つの観念へのケアリング」との間にも、「共通のパターンがある」としている。メイヤロフにおいては、それぞれのケアリングの相違点よりも、共通点を重視しているのである。

メイヤロフが見いだしたケアリングにおける共通点とは、「他者の成長を援助する」ということである。

メイヤロフは、「他者の成長を援助すること」としてのケアリングについて、次のようにいう。

「私は、他者を自分自身の延長として、また、独立し、成長する欲求を持っているものとして経験する。すなわち、私は、他者の発達を自分自身の福祉感覚 (sense of well-being) と結びついているものとして経験する。そして、私自身が他者の成長のために必要とされていることを感じとる。私は他者の成長が持つ方向に導かれて、肯定的に、かつ他者の欲求への献身をと⁽¹⁸⁾もなって応答する。」

メイヤロフは、「他者」を「自分自身の延長として」「経験する」と同時に、「他者」を「他者」として「独立」している人格として捉えている。これは、メイヤロフが論文「ケアリングについて」において言及した「差異の中の同一性」のことであるとみなすことができる。

メイヤロフは、また、「他者の成長を援助すること」としてのケアリングにおいては、「他者の成長が持つ方向に導かれて、肯定的に、かつ他者の欲求への献身をと⁽¹⁸⁾もなって応答する」として、「献身」の重要性に注意を促している。

メイヤロフは、「献身」について次のようにいう。

「献身は、それが友情にとって統合的な部分であるように、ケアリングにとって本質的なものである。」⁽¹⁹⁾

「献身が失われれば、ケアリングは失われてしまうのである。」⁽²⁰⁾

メイヤロフは、「献身」なくしてケアリングは成り立たないとしているのである。

メイヤロフは、「他者」すなわち「ケアされる者」の「成長を援助すること」と、「献身」が、ケアリングの特徴であるとしているのである。

②の「『場所の中』の存在」については、メイヤロフは次のようにいっている。

「一人の人間の生活の脈絡において、ケアリングは、彼の他の諸価値と諸活動をケアリングの周囲に位置づける仕方をしてしている。彼の諸ケアリングが包括的であるがゆえに、その位置づけが総合的である場合、彼の生活には基本的な安定性が生まれる。すなわち、彼は場所を得ないでいたり、自分の場所を絶え間なく求めてたださすらっているのではなく、世界内の (in the world) 『場所の中』にいるのである。特定の他者へのケアリングをとおして、ケアリングを通じて特定の他者に役立つことによって、人は自身の生活の真の意味を生きているのである。人は世界内で心を安んじていられるという意味においては、支配したり、説明したり、評価することをとおしてではなく、ケアリングやケアされることをとおして、人は心を安んじているのである。」⁽²¹⁾

メイヤロフは、「ケアリングの周囲」に「諸価値と諸活動」が位置づくとしている。これは、ケアリングをとおして「諸価値と諸活動」が形成されていくことを意味している。そして、そのさいのケアリングは、「包括的」「総合的」であるとメイヤロフはしている。

では、そのようなケアリングが生起するメカニズムは何であろうか。

メイヤロフは、「世界内の『場所の中』」において生起するとしている。

そこは、「ケアリングやケアされることをとおして」「心を安んじて」いることのできる「場所」である。すなわち、その「場所」は、単なる「世界内」ではなく、ケアしケアされている「世界内の『場所の中』」なのである。⁽²²⁾

なお、メイヤロフは、論文「ケアリングについて」において14の「特質」を指摘したけれども、著書『ケアリングについて』では、「忍耐」「信頼」「謙遜」「希望」「勇気」に加え、「知ること」「リズムを変えること」「正直」を「ケアリングの主な因子」としている。⁽²³⁾さらに、「ケアリングの啓蒙的なアспект」として、「ケアリングをとおしての自己を実現すること」「過程の優位」「ケアする能力とケアされる能力」「他者の恒久性」「ケアリングにおける自責の念」⁽²⁴⁾「相互性」「ケアリングであるといえる限界」を挙げている。

III ノディングスのメイヤロフに対する評価

ノディングスは、主著『ケアリング——倫理学と道徳教育への女性的アプローチ——』において、メイヤロフの『ケアリングについて』に言及している。

ノディングスはいう。

「私たちの分析では、ケアする人 (one-caring) に十分な注意が払われる必要があることがわかる。なるほど、私たちは、ケアリングを、第三者として、外側から判断する場合があるけれども、ケアリングの本質的な諸要素 (elements) がケアする人とケアされる人 (cared-for) との関係にあることは、たやすく見てとれる。1冊の小さな好著『ケアリングについて』で、ミルトン・メイヤロフは、ケアリングを、おもにケアする人の視点をとおして描いている。彼は、冒頭で次のように述べている。『他の人格をケアすることは、もっとも深い意味において、その人の成長及び自己を実現することを援助することである。』

私は、この問題に、これとは少し違ったアプローチをしたいと思う。というのも、私は、他者を実現することの強調は、ケアする人の中で続けられていることの記述を、あわてて見過ごすことにつながると考えるからである。さらに、問題は、助け合い (reciprocity) を議論するさいにも生じる。そして、ケアされる人の役割も、いっそう綿密に吟味される必要があると思う。しかし、メイヤロフは、恒久性、自責の念、相互性の重要性と、ケアリングの限界を指摘して、私たちに有意義な出発点を与えてくれた。」⁽²⁵⁾

ノディングスは、「ケアリングの本質的な諸要素」を「ケアする人とケアされる人との関係にある」としている。このことを、ノディングスは、「ケアリング関係は、もっとも基本的な形において、ケアする人 (carer) と、ケアの受取人 (recipient) すなわちケアされる人という、二人の人間存在間のつながり (connection)、もしくは出会い (encounter) である。」⁽²⁶⁾ともいう。これは、メイヤロフも「ケアする者」「ケアリングの関係」「ケアされる者」をケアリングの3要素としていたので、メイヤロフとノディングスの共通点として捉えることができる。

しかしながら、ノディングスは、メイヤロフが「他者を実現すること」、すなわち「ケアされ

る人」の自己実現を強調しすぎているとしている。ノディングスは「ケアする人の中で続けられていること」や、ケアする人とケアされる人との「助け合い」や、「ケアされる人の役割」を強調しているのである。これは、メイヤロフとノディングスの相違点として捉えることができる。ノディングスは「ケアする人の中で続けられていること」に関わって、次のようにいう。

「ケアされる人のために行い (act) に関与すること、ふさわしい期間をとおして彼のリアリティに関心を持ち続けること、そしてこの期間を超えて関与の仕方を絶えず更新することは、内面からみたケアリングの本質的な諸要素である。メイヤロフは、献身とケアされる人における成長の促進について言及している。わたしは、専心没頭 (engrossment) と動機づけ転移 (motivational displacement) からはじめたい。」⁽²⁷⁾

ノディングスは、「『ケアリング』において、私は、専心没頭と動機づけ転移によって特徴づけられるケアする人 (carer <or “one-caring” >) の意識状態を記述した」⁽²⁸⁾ともいう。

ノディングスは、メイヤロフのように「献身」や「ケアされる人における成長の促進」ではなく、ケアする人が「専心没頭」と「動機づけ転移」によって特徴づけられるとしているのである。しかもノディングスは、この「専心没頭」と「動機づけ転移」は、「ケアする人の意識状態」に関わるものであるとしている。これも、メイヤロフとノディングスの相違点といえる。

ノディングスはまた、「とくに、ケアリング関係は、ケアする人には専心没頭と動機づけ転移を要求し、ケアされる人には応答 (responsiveness) や助け合いといった形を要求する」⁽²⁹⁾として、ケアされる人の視点も入れている。このケアされる人の視点を入れていることも、ノディングスとメイヤロフの相違点といえる。

しかし、ノディングスは、メイヤロフとの共通点も強調して、次のようにいう。

「教師は『包括(inclusion)』することができる」とブーバーは述べているが、この言葉はケアする人がケアされる人を教えようとするを正確に記述しているように思う。たとえば、ミルトン・メイヤロフはケアリングを議論するさいに、ケアする人の中に、次のような二重性があることを強調している。すなわち、ケアする人は自分自身のために行いをしているかのようでありながらも、他の人への投企 (projects) と、その他の人が独立しており、一個の主体であるという付随的な実現とに則って行為するように導くような、『ともに感じる (feel with)』ということにみられる二重性⁽³⁰⁾である。『包括』において、教師は生徒を受け入れ、実際に二重性をもつようになる。」

「私が議論してきた種類のかかわりあいやケアリングは、人数、時間、目的意識に関する制約のせいで不可能であるとして、退けられることが多い。『教育学的ケアリング』に関する議論の中でリチャード・ハルト (Richard Hult) が言及しているように、そのような要求が、今度は我一人といった類の密接な人的関係性を要求するようになると思われる。…………… (中略・引用者) ……………ハルトは、メイヤロフや私が記述してきたものとしてのケアリングが『教師に要求されるケアリングの種類であることができない』と結論づけている。私は、それこそが理想的には教師に要求される種類のケアリングであると主張する。

私は、ハルトやこのような立場をとる者たちが、ブーバーが我一人の出会いとして記述してきた要求を、また、マルセルが『自由裁量の可能性』という用語で記述してきた要求を、メイヤロフが独立の認識と同定されるもの (identification-with-recognition-of-independence)

として記述してきた要求を、私が専心没頭と動機づけ転移として記述してきた要求を誤解していると思う。私は、すべての生徒と、深く、持続的で、時間をかけてできあがる個人的関係を確立する必要はない。私がしなければならないことは、生徒が私に呼びかけてくるがゆえに、生徒に対して——それぞれの生徒に対して——全面的に、かつ無差別⁽³¹⁾に向き合うことである。時間は短いかもしれないけれども、出会いは完全なのである。」

ノディングスは、「包括」に関してメイヤロフとの共通点があるとしている。これは、「独立の認識と同定されるもの」、すなわちメイヤロフのいう「差異の中の同一性」に関わるものである。

また、ノディングスはメイヤロフとともに、ハルトが否定する「密接な人的関係性」こそ、「理想的には教師に要求される種類のケアリングである」と捉えているのである。ノディングスは、「『母親』は役割ではない。『教師』も役割ではない。」⁽³²⁾として、「出会いが頻繁に起こるような、そして他の人の倫理的な理想に必然的に関わるような様々な専門職においては、私は、なによりもまずケアする人であり、第二に専門化した特別な諸機能を果たしているのである。教師としては、私は第一にケアする人である。」⁽³⁴⁾という。ノディングスは「役割」よりも「密接な人的関係性」をもって行われるケアリングを重視しているのである。

ノディングスは、メイヤロフのいう「差異の中の同一性」や、ケアリングが「ケアする人」と「ケアされる人」との「関係性」にあることは認めながらも、メイヤロフよりも「ケアする人」の意識状態に重きを置いているのである。

註

- (1) この点については、たとえば、以下の文献を挙げることができる。

佐藤 学、1995年、『学び その死と再生』、太郎次郎社、161-172ページ。

藤田英典、1997年、『教育改革——共生時代の学校づくり——』、岩波書店、156-168ページ。

齋藤 勉、1997年、『「いじめ問題」から授業・学校改革を考える』、明治図書、76-83ページ。

- (2) 波多野里望は、「児童の権利に関する条約」における「ケア」の日本語訳が「保護」、「世話」、「養護」、「養育」、「監護」となっている理由を、「『養護』の英語はcareであるが、careという語は本条約の中でさまざまな文脈に用いられており、その意味するところが必ずしも同一でない。」からであると述べている。

波多野里望、1995年、『逐条解説 児童の権利条約』、有斐閣、33ページ。

- (3) 小稲義男編集代表、1990年、『新英和大辞典』、研究社、326ページ。

- (4) 新村出編、1998年、『広辞苑 第5版』、岩波書店、811ページ。

- (5) Nel Noddings, 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press. ネル・ノディングズ著、立山善康・林泰成・清水重樹・宮崎宏志・新茂之訳、1997年、『ケアリング 倫理と道徳の教育——女性の観点から』、晃洋書房。

- (6) Milton Mayeroff, 1971, *On Caring*, Harper & Row. ミルトン・メイヤロフ著、田村真・向野宣之訳、1993年、『ケアの本質——生きることの意味』、ゆみる出版。

- (7) Milton Mayeroff, 1965, "On Caring", *International Philosophical Quarterly*, Vol. V, No. 3, pp. 462-474.

なお、この論文は、邦訳書の中で付録Iとして訳出されている。

ミルトン・メイヤロフ著、田村真・向野宣之訳、1993年、『ケアの本質——生きることの意味』、ゆ

みる出版、183-215ページ。

- (8) Mayeroff, "On Caring", p.462.

邦訳書、183ページ参照。

- (9) Ibid., pp.463-472.

邦訳書、186-210ページ参照。

- (10) Ibid., p.464.

邦訳書、187-188ページ参照。

- (11) Ibid., p.467.

引用文中の傍点は、原文ではイタリック体である。

邦訳書、196-197ページ参照。

- (12) Ibid., p.462.

邦訳書、184ページ参照。

- (13) Ibid., p.463.

邦訳書、185ページ参照。

- (14) Ibid., pp.462-463.

邦訳書、184-185ページ参照。

- (15) Mayeroff, *On Caring*, pp. 2-3.

邦訳書、16ページ参照。

- (16) Ibid., p. 1.

邦訳書、13ページ参照。

- (17) Ibid., pp.1-2.

邦訳書、13-15ページ参照。

- (18) Ibid., pp.9-10.

邦訳書、26ページ参照。

- (19) Ibid., p.8.

邦訳書、24ページ参照。

- (20) Ibid., p.8.

邦訳書、24ページ参照。

- (21) Ibid., p.2.

邦訳書、15-16ページ参照。

- (22) メイヤロフが単に「世界内」とは思わず、「世界内の『場所の中』」という表現をとっていることに、注目したい。というのも、単に「世界内」といった場合、ハイデッガーのいう「世界内存在 (being-in-the-world)」が想起されるからである。また、「場 (field)」でもなく「『場所の中』の存在」という表現にメイヤロフの独自性がみられる。なお、ハイデッガーの「世界内存在」及び「場」については、以下の拙論を参照願いたい。

中野啓明、1992年、「デューイにおける現象学的要素」『日本デューイ学会紀要』、第33号、1-6ページ。中野啓明、1994年、「ケシュテンバウムとトルートナーの分岐点」『日本デューイ学会紀要』、第35号、63-68ページ。

- (23) Mayeroff, *On Caring*, pp.13-28.

メイヤロフ著、田村真他訳、『ケアの本質』、33-65ページ参照。

- (24) Ibid., pp.29-40.

邦訳書、67-90ページ参照。

- (25) Noddings, *Caring*, p. 9.

ノディングズ著、立山善康他訳、『ケアリング』、14-15ページ参照。

- (26) Nel Noddings, *The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to Education*, Teachers College Press, p.15.

引用文中の傍点は、原文ではイタリック体である。

- (27) Noddings, *Caring*, p.16.

ノディングズ著、立山善康他訳、『ケアリング』、25ページ参照。

- (28) Noddings, *The Challenge to Care in Schools*, p.15.

引用文中の二重カギは、原文ではイタリック体である。

- (29) Noddings, *Caring*, p.150.

引用文中の傍点は、原文ではイタリック体である。

ノディングズ著、立山善康他訳、『ケアリング』、232-233ページ参照。

- (30) Ibid., p.177.

邦訳書、273-274ページ参照。

- (31) Ibid., pp.179-180.

邦訳書、277-278ページ参照。

- (32) ハルトの論文は、次のものである。

Richard E. Hult, Jr., 1979, "On Pedagogical Caring", *Educational Theory*, Vol.29, No.3, pp.237-243. リチャード・E・ハルト・Jr.著、齋藤勉他訳、1998年、「教育学的ケアリングについて」『教育哲学・道徳教育研究』、No.11、新潟大学教育学部教育学・道徳教育研究室。

なお、ハルトに対するノディングズの批判については、以下において発表した。

中野啓明、1998年、「ハルトに対するノディングズの批判の観点」、日本デューイ学会第42回研究大会発表要旨集録、63-64ページ。

- (33) Noddings, *Caring*, p.175.

ノディングズ著、立山善康他訳、『ケアリング』、270ページ参照。

なお、ノディングズはケアリングの事例を用いるさいに、わが子への母親のケアリングの例を多用している。この点において、父親のケアリングの例を念頭に置いているメイヤロフとは対照的である。

- (34) Ibid., p.176.

邦訳書、271ページ参照。